

受賞のことば

## 現地語文書から見える新たなインド史

金沢大学准教授 小川 道大

21 世紀に経済が急成長したインドについて、近年ではその文化や歴史にも多くの関心が集まり、従来のインド像が様々な形で書き換えられている。歴史学の分野でも植民地支配の見直しが行われ、インドをほぼ統一したムガル帝国が衰退し、イギリスによる植民地支配が始まる 18 世紀を「暗黒時代」とみなす従来の歴史観が問い直されている。ムガル帝国の衰退後に、インド西部を中心に発展したマラーター同盟に注目し、19 世紀初頭の同地の植民地化を再考した本書もこうした研究の中に位置づけられる。ただし史資料を読み解く歴史学の手法で植民地化を考察することは容易ではない。植民地支配を経験したアジア・アフリカの国々では、宗主国であったヨーロッパ諸語の文書が多く残るのに対し、現地語文書は希少か、存在しない場合が多い。インド史も文書の残存状況を反映して植民地化前後で研究の分断が生じ、英語文書を用いて前植民地期の状況を推し測る形で植民地化の検討が行われた。本書はこの問題を考慮して、例外的に多くの現地語文書が残るインド西部を対象に、現地語と英語の史資料を組み合わせることで前植民地期から植民地期への社会経済変化を連続的に考察した。

本書は、重要な植民地政策であった新地稅制度がインド西部で最初に導入されたインダプール郡に注目し、その導入に至った歴史的背景を分析して植民地化を再考した。新制度は現地の有力者を排して納稅者たる農民と政府との直接の稅取決めを目指し、イギリス人行政官が有力者が不在であると判断したインダプール郡に導入された。本書は現地語史料の分析から同郡がマラーター同盟下の特別な地域であり、同地の前植民地期の地稅制度の特殊な變遷と崩壊という変化の結果として、英領化前夜に現地有力者の不在の状況が同郡に生じたことを明らかにした。イギリス人による報告書にこの歴史的背景は記されていないが、本書は植民地行政官の意識を超えて、実態として前植民地期の社会經濟狀況が植民地政策に大きく影響したことを示し、植民地化を考察する長期的な視座を提示した。

インド西部には、誰にも読まれていない現地語文書がまだ数多く残っている。恩師をはじめ多くの方々への感謝とともに、今後も研究に精進していきたい。

おがわ みちひろ

2004 年東京大文学部卒、13 年インド・プネー大より Ph.D.(歴史学) 取得。日本貿易振興機構・アジア経済研究所研究員などを経て、16 年より金沢大学国際基幹教育院准教授。1981 年生まれ。

